

◇ 巻頭言 ◇

未来社会と分析化学

渡 會 仁



会員の皆様におかれましては、つつがなく新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

日本分析化学会は、1952年に、「分析化学に関する学理技術の進歩を図るとともに、会員相互の連絡研修を行い、もって学術、文化の発展に寄与することを目的とする。」として創設されました。今日の分析化学を取り巻く状況は、創立期に比べ大きく変貌^{へんぼう}していることは言うまでもありません。大学等においては分析化学教育の基礎教育化が進み、さらに社会における分析化学の利用も相当に広まっています。分析化学に関連する国の研究費も増大しています。一方で、分析化学の普及が、分析化学の専門研究分野としての存在感を弱めているとの指摘もあります。バイオや環境等の分野に対して新たな分析法を提案する努力が求められていると考えべきでしょう。分析化学の活動は、分析化学を作る、分析化学を改良する、分析化学を利用するなど、様々な方向性を持ちますが、その多様性が発展の大きなエネルギーとなっていると思われます。

未来社会を想像するとき、それは緩やかに制御された経済活動のなかで、人類の健康、安全、平和が保障されたものでありましょう。そのような保障体制を築く上で、分析化学は社会の重要な監視装置、安全の解析評価装置としての役割を担うものと思われます。現代科学の状況から想像するに、ロボット、センサー、IT、テーラーメイド医薬などは、間違いなく進歩するでしょう。それらは、いずれも多岐にわたる計測、診断、解析評価技術の進歩を必要とするでしょう。未来社会が、持続性を第一義に考えることになるならば、新物質、新材料の開発においても、短期的経済効果ではない自然への礼節をわきまえた評価尺度が考案されることでしょう。それとともに、より身近な新たな形態の分析ビジネスの可能性も考えられ、それは生活のスタイルにも影響を与えるものと思われます。すなわち、分析化学は社会における物の見方を変えるという点で文化的影響を持ちうると思われます。

高度経済成長の時代は、分析部門は経営に対する貢献度が一段低いように言われてきましたが、社会の持続性を目指す物質評価の時代にあっては、分析部門と生産部門は、車の両輪としてその役割を期待されることでしょう。大学における分析化学の研究は、このような状況を踏まえて、新たな物質観を形成するために、分析化学を作る基礎分野と分析化学を利用する応用分野においてバランスよく人材を育成する必要があります。現在進められている溶液分析化学から機器分析法にわたる広い分析化学の教育を理工生物系の基礎教育とし、さらに異分野と連携した授業構成の中から新たな分析原理の発想を育成する高度教育の体制が望まれます。そして、分析化学が、物質文明の背後にある本来の自然を見通し、そこに心を通わせるための道案内となることを期待するものであります。

[Hitoshi WATARAI, 大阪大学大学院理学研究科, 日本分析化学会会長]